

## 開化期播磨の歌人

### 岩崎利記

管 宗 次

(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

#### 一、はじめに

播磨は、老中を勤める酒井家の姫路藩を中心として、大小様々の藩があり、赤穂の森家、龍野の脇坂家、小野の建部家など、石高は小さくとも文雅、学問に傾る熱心な藩が多かった。また小さな旗本領や飛び地が入り組み、行政も複雑であった。

そして、塩田に成功した田淵家や、大地主の永富家など、家柄や、家格を誇る名家が少なくなく、地場の伝統産業も江戸時代には、その多くが確立し、富裕な町人、農民階層が出来上がっていた。

本稿で取り上げる岩崎利記(いわさきとしのり)は、そうした播磨の一富豪の主人であるが、地縁、血縁によって結ばれた文化グループの構成員の有力な一人で、公用などのため、江戸、京、大坂へ度々旅にでかけ、一地方の文人としては恵まれた環境で、見聞と教養を広げることのできた人でもあった。

和歌と湯茶を愛した利記は、茶会、歌会には遠路を問わず、出席し、また自宅が西国街道より遠からぬところにあつたため、しばしば往来の文人墨客の宿所となり、岩崎家は文人たちの溜場ともなつた。

折しも時代は幕末から明治、次のような詞書の和歌も、利記の歌集『朽葉集』なかから拾うことができる。

將軍家の長州征討すとして軍人ともあまた西国におもむき世の  
いとさわかしかりしに慶応二年の正月またて平らきてことなくをさ  
まりければ

武士のつるきもさやにをさまりて

のとけき御代にかへるはる哉

「慶応二年正月またて」とあるので、これは第二次長州征伐発令が慶応元年四月にあつたことをさしている、同年九月に勅許を得て、実戦に入つたのは慶応二年六月からであつたが、慶応二年正月に薩長同盟が成り、薩摩藩の出兵拒否があつたり、將軍家茂の大坂城での病没があつて八月に休戦の朝令を得て、年末には孝明天皇の崩御があつて解兵の沙汰書を受け、ようやく終結となつた。しかし右の詞書をみると、西国街道の人々には、慶応二年の正月には、もはや終末とみたことがわかる。とかく、下々の人心の方が時代の流れには敏感でもあつたりするが、これも当時のリアルな時事の状況を写しとつたものにすぎないのかもしれない。

政治状況の流れは、米価を中心とする経済に大きく振幅を及ぼすので京大坂だけでなく、江戸にまで足を運んだことのある利記が世の流れに敏感であつたのは当然といえれば当然のことといえよう。

#### 二、岩崎利記

岩崎利記は播州赤穂の人、坂越浦里正であるが、好學の人で、特に和歌への執心はとりわけのものがあつた。『名家伝記資料集成』によると、次の如くあがつている。

岩崎利記イハサキトシノリ

通称仁右衛門 号甚左衛門 落園

文化十三年丙子年生

播磨赤穂坂越浦 「久遅葉集」(歌集明治十五年刊)序文に明治十五年

七月末、六十あまり七才云々その自筆序文あり

・類題鴨川三郎集附録下二

・四郎集 〃五

・五郎集 〃五

・類題和歌鴨川集詠史歌集五

・名所歌集附録三五

・類題青藍集下五

・類題秋草集初篇四

- ・類題清風集作者姓名録六
  - ・明治五百人一首初篇二七
  - ・国学人物志初篇三五
  - ・和歌千種の花下七〇
  - ・明治開花和歌集作者姓名録一
  - ・類題新年歌作例集二〇
  - ・故学人姓名録二七
  - ・大日本歌書綜覧中三三八
- (朽葉集)

右のうち「久遅葉集」とされているのは、末尾にある『朽葉集』のことで、同歌集は次章で詳細に取り上げることにする。

『和学者総覧』によると、

岩崎利記(称)小吉・直三郎・仁右衛門・甚右衛門

(法)円浄

播磨赤穂 明治16・10・26没68歳

坂越浦里正 『先哲偉人遺芳録 西播篇』(7)

『名家伝記資料集成』の「号甚左衛門」は「甚右衛門」の誤りであろう。

### 三、『朽葉集』

乱版という語を用いた場合、印刷方法の異なるもの、版面の異なるものを一冊に綴じたものをいうが、『日本古典籍書誌学辞典』をみても、意味の異なる「爛版」の見出ししかあげられていないのは不思議である。明治期出版の本には一冊のうちに、木版、活版、銅版、石版と様々な版式のもの、印刷方法のものが、あわせられている書籍がよくある。

ここであげる和装活字版本の『朽葉集』も、そうした本の一つであるが、旧派歌人たちは活字版を喜ばぬ者が多く、他のジャンルや新派歌人たちと一線を画したかのように、活字を拒む者が多かった。理由は二つであ

る。

一、一字ずつの変体仮名の用字にさえ、うるさい作法のある和歌の整版を、無知な職工にまかせると誤字が多い。

二、和歌を詠む者は国学者が多く、伝統的な技術文化に西洋技術が取って換わることを感情的に嫌った。

和装本『朽葉集』の序文は木版刷(整版)、本文は活字版、跋文は再び木版刷(整版)で、いかにもこの時代の出版物らしい歌集である。

活字版の部分は大阪高麗橋で活字版の法律書と歌集を出版していた歌人の弾琴緒が経営する桐園の仕事である。そのことは同書の奥付にも記されていないが、活字の字体はまぎれもなく桐園のもので、『五百人一首初篇』や『御世の花』『類題秋草集』などの歌集の活字と同じものである。

また、この頃の京阪神での歌集は桐園で出版を請負ったものが多いが、『朽葉集』の序文の一つは中村良顕であり、もう一つが弾琴緒であることを見ると、桐園からの出版は当然のことかもしれないが、歌集を一覧すると、特に親しい関係であったらしく、中村良顕の養父である中村良臣が赤穂藩の武士であったから、地縁の深さによるものであるらしい。

『朽葉集』の序文を次にあげる。

朽葉はいろなきくち葉にあらずしてにははしきあきやまのてり葉なしたりいまよりこれのうれ葉した葉よ風のた、りにつくしあつまと散しきたらむにはきりのまかきにこほれいてたるはつしほよりもなか／＼になつかしうた、に見すくす人やはあるへきかくて老木の年頃今ひとしほといみしう寒きあしたの霜にもそほれみにしみわたる夕の露にもたちぬれつ、そめつくしたるこ、ろふかさのいちしるきをするのにしきとなしはてなむはとその子何かしかひろひあつめたる親おもひの心のいろもまたむになそらへなくこそおほゆれ

明治十五年のあき紅葉かつちる／＼しかのこ毛の筆さしぬらして浪花の朽木園にこもれる 中村良顕しるす

次は序文は弾琴緒のものである。

家々の集とてあまたつたはりたるいとおほかるなかにこれはとこ、ろとめらる、かすくなけはその人々の世にありしほとよみおきたりし歌ともをよしあしのわいたためなく数おほきをたけきものにかきつ

めたれはなりけり此集はさるならはしをはなれや岩崎翁かわかきほとより花の露もみちのしづくにたちぬれつ、そめつくされたる言の葉のいろふかきをのみひろひあつめたるひと綴なれは若木のうめのかくはしきにほひ老樹のまつのをしきすかたもたちましりてとり／＼をかしう愛はやさる、はかのうるはしき桜もあまた咲みたれたらむよりは春におくれしひと木の散残りたるか中々になつかしくてあはれてふことをひとりと、めたるたくひになむ

弾こと緒しるす

中村良顕序文、弾琴緒序文ともに社交以上のなものでもないようだ。岩崎利記の跋文は次のようなものである。

『名家伝記資料集成』には「自筆序文」とあるが、自筆版下の跋文である。

世の中のほたしにのみつなかれてくつをれなんもとをりふしのあはれをすすさすこ、ろの駒に鞭うちて野山の花を手をり紅葉をかさしてうたひ出たる年頃の歌とをとり出みるに花も実もなき深山木の朽葉なれはかい捨なむとするを子らか引と、めて是そちる世なき形見とてそ成侍らめいかて其うちよりひとつふたつをえり出てすり巻となし孫子の末迄も伝へまほしくなといとそ、のかすにいなみかたくてかくはものしつるにそなむ

明治十まり五とせの長月末つかた六十

まり七歳の翁岩崎利記しるす

これによって歌集の命名の由来などはわかり、歌集の編も撰も自撰であることがわかる。

序文三丁（中村良顕序二丁、弾琴緒序一丁）本文二十八丁、「近世歌集撰入書目並歌数表一丁、岩崎利記跋文一丁、全三十三丁」という薄冊のものであるが、所載の和歌はなかなかの力量をみせた歌集でもある。

次に『朽葉集』より、和歌を拾ってみることとする。歌集は春部からはじまる伝統的な部立による。

初春水（開一）

たえ／＼におつる笕の水さへも  
こほらぬはるになりけるかな

月前霞（青）

やまのはの月にさはらすたつみれは  
心にこめたるかすみなりけり

三月はかり龍野へゆく道にて（鴨四）

春霞たつ野の城門はみえねとも  
ときのつ、みのおとそまぢかき

春雨夜静（鰻六）

うくひすのさへつる声もましりしを  
くれてしつけき雨そ、き哉

杜若（秋一）

かきつはたまことの花をけふふれは  
すりし衣はいろなかりけり

嘉永六とせの夏いみしう照はた、きて

雨こひせぬ里もなかりければ

たみ草もかれふすはかりみな月の  
其名しるくもてるひかけかな

九月はかり難波にのほりける時舟路にて（鴨三）

庭よしと雁もかろらのこゑたて、  
月にひ、きのなたわたるなり

落葉随風（鴨三）

朝ほらけ小倉のやまのたかねより  
おろすあらしもいろ付にけり

馴恋（鴨三・青）

いかなれは馴ゆくま、にまよふらん  
恋の道こそあやしかりけれ

白地恋（秋一）

移香の残るをみれはいさ、めに  
あひみしゆめもうつ、なりけり

河（秋二・垣二）

水清きよし野の川はことの葉の  
はなさへうかふところなりけり  
但馬の国へゆく人のわかれに

わかれなはあまの橋立まつのみそ  
とくたちかへれ与謝野のうら波

烟草

から国になひきそめたるけふり草  
わか日の本にいつ根さしけむ

菊の花かけるかたに(秋二)

露霜にこゝろもおかぬうつし絵の  
きくこそ千代のにほひ也けれ

嘉永三年三月浅野長矩ぬしの百五十年の忌を赤穂の花岳寺にてと  
りおこなはれる時(鴨三)

はてもなくかなしきものは武蔵野の  
つゆときえにし昔なりけり

嘉永五とせ義士の百五十年忌なりければ  
君かためみかきくしこゝろこそ

ますら健雄のかゝみなりけれ

四、交友

詞書から交友の知れるものも『朽葉集』は多い。

三木政矩か宿の花みにゆきて

かくれかの春をしめたる花なれば

風のうき世ものかれはてなん

八月十五夜よひのほと雨ふりしか夜ふけてはれわたりければまた  
のあした橋本惟孝かもとへ

はれにけるよるも最中の月影を  
おきゐてやみしねてやみさりし

かへし 惟孝

よひの雨の露もたまなす月影を  
おきゐてもみきねてもななめき

大藤高雅翁の都の花見にのほるとてたちよられければ(鴨四)

みやこ辺といそくこゝろの駒とめて

浦曲の花もみてをゆかなむ

かへし

みやこ辺といそくこゝろをのとめつ、  
ゆふ浪かすむうらの生島

水野直躬翁あすはみやこにかへらんとてたひの調度ともしりいそ  
かるゝに其夜より雨ふりいて、はれぬへくもみえさりければまた  
のあしたよみていたしける

けさはしも雨にたものかはく哉  
ふらすはなに、君をとゝめむ

かへし

直躬

たちいてむ人をとゝむる春雨は  
きみかこと葉のはなもさかせつ

中村良顕大人の赤穂に物せられける時生島の藤の花咲いてなんに  
は告しらせむとかねてちきりおきたりしに雨ふりつゝきて日かす  
たちければある日消息のおくに

良顕

藤なみのまつにかゝりてありとしも  
しらていつこに心よすらむ

かへし

おもへ君まつとはしれと藤かつら  
くる日くもあめはれすして

難波にやとりける時木村一枝かもとをとふらひけるにいとねんこ  
ろにあるししけるよろこひひやるとて後のたよりに

なには江のあさからさりし心こそ  
みをつくしても酬ひかたけれ

なにはにやとりける時生駒寛忠かもとより篠廼露といへる銘酒に  
そへてよみおこせける歌

色香なき小篠の露のひとしつく  
千代もとちきるきみにすゝめむ

かへし

なからへて八千代へぬともわすれめや  
小篠の露のかゝる恵みを

いとしたりせし橋本惟孝みまかりければ追悼会せんとて人々興

福寺につとひて寄紅葉懷旧といへることを(秋一)

たむけれとをれば紅葉もこほれけり  
我が涙のみもろきけふかは

森寺美郷翁の一周忌に去年の秋わか菊園のまともに歌よまれしこと  
とのおもひいて、

袖ぬらすたねとことしはなりにけり

菊にかけつることの葉の露

一月はかり津野定信の母のみまかりければ

死出の山ゆきもきゆへき春またて

つひのかとてを何いそきけん

三木正利はことに菊を愛て、としあまた裁生しける人なりしに春  
のころみまかりければ

しら菊の千代の根さしにあえもせて

秋をもまたて枯しきみかな

十一月はかり田淵政樹の妻のみまかりければ後によみてつかはし  
ける

この頃はひとりふすまの寒けさに

むすひかぬらむありし世の夢

神無月はかり柴原孝治かみまかりければ

そめつくすもみちをさそふ木枯に

君もちらむとおもひかけきや

柴原熙義か母の八十の賀に

八十島によるとし浪もわたりこし

君かよはひそかきりしられぬ

右の詞書より名だけを抜くと、三木政矩、橋本惟孝、大藤高雅(藤井高雅)、水野直躬、中村良顕、木村一枝、生駒寛忠、森寺美郷、津野定信、田淵政樹、柴原孝治、柴原熙義などがあがり、それぞれ岡山、大坂、播州という三つの地域の歌人で、西国街道の三つの地域をつなぐ所にあつて、山崎利記が西へ東へと往来し、また人々を迎えたことがよくわかる。幕末明治の女流歌人として著名な高畠志貴婦(式部)とは特に懇意

であつたらしい。

## 五、高畠志貴婦

高畠志貴婦とは、特に歌友として親しかったものらしく、次のような詞書のある和歌がある。

高畠志貴婦か九十七になりけるとしよみてつかはしける

三とせへはわれうくひすに先たちて

百よろこひの初音たて、ん

明治十四年五月はかり西京にのほりて高畠志貴婦をとふらひけるにをりしも家にあらぬほとなりければつひにえあはて難波にくたりてしはしかほとと、まりをるうちみまかりけるよしき、て

加茂川やあふ瀬なくして水の泡の

きえしとききは袖はぬれけり

おなしをり西京の迎賓館にて追悼会あるよしき、てひた、ひ都にのほりて兼題時鳥驚夢といへるあとをよみてたむけける

ほと、きすことしも君とまつ夢を

なき世にかへすよはのひと声

おなしく十五年四月はかり西京にのほりける時円山にはふりける

志貴婦のおくつきにて

此春はみやこのさくらみおろして

たかきこと葉の花やさくらむ

最晩年の高畠志貴婦の様子もわかつて興味深いが、岩崎利記自らも、『朽葉集』を出版した翌年の明治十六年十月二十八日に六十八歳で没している。

## 六、開化短歌

先述するのに詞書に(鴨三)(開一)などとあつたのは、『鴨川三郎集』『明治開化集初編』などの記号で、和歌の頭注として施されている。つまり、これらの注があるものは、みな当時流行の類題集に採られた秀歌と

いうことになる。部立も伝統的なものと先述したが春夏秋冬恋雑の後に「新題部」として、開化題の和歌、いわゆる開化短歌が十四首、別立にしてまとめられている。伝統的な部立のなかに組み込んでいないのは、当時の歌集の編集方法として珍しく、編者の意識や意図がはかられておもしろい。

この点に一特色のある歌集といつてよいであろう。次にそのうちより、数首抜抄して本稿のしめくりとしたい。

#### 王政一新

たみ草のおひさきよけにおきかふる  
恵みのつゆのふかき御代かな

#### 萬国交際

もろともに余れるものと物かへて  
えみしもゑみの眉ひらくらん  
なにはにものしける時造幣寮をみわたして  
難波津は民のかまとの外にまた

けふりをたて、にきはひにけり

#### 博覧会

人こゝろたまともみかけ千万の  
たからのはこもひらけたる世は  
小学校

里毎にうなるはなりをしへ草  
つみあらそへる世となりにけり  
三男を中学校にいたしける時  
いまよりはこゝろの駒に鞭うちて  
人にまなひのみちなおくれそ

#### 瓦斯燈

小車のたえぬちまたのともし火は  
ひらくる御代のひかり也けり

#### 汽船

外国のたからをつみてくる船の  
けふりも四方になひく御代かな

#### 端舟(バツテラ)

みきひたりみなく權をつはさにて  
かよふをみればあめの鳥船  
明治十二年の夏虎列勅病てふ病はやりて人あまた死にければ  
世の人を黄泉路にさそふ禍神の  
なすてふまかはこれらなるらん

#### 参考文献

- (一) 国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』(平成二年三月二十日刊、汲古書院)九十六頁
- (二) 森繁夫編、中野莊次補訂『名家伝記資料集成』第一卷(昭和五十九年二月一日刊、思文閣出版)三六三頁
- (三) 内海七郎編『先哲遺人達芳録 西播編』(播磨新聞社、昭和四十六年刊)
- (四) 井上宗雄・岡雅彦・尾崎康・片桐洋一・鈴木淳・中野三敏・長谷川強・松野陽一編『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年三月十日刊、岩波書店)
- (五) 木村三太郎『浪華の歌人』(昭和十八年四月三十日刊、全国書房)二九九頁
- (六) 熊谷武至『類題和歌集私記(東海学園国語国文叢書第四篇)』(昭和四十七年八月一日刊、熊谷武至発行)

## Iwasaki toshinori:A Waka Poet in the Early Meiji Era

Shuji Suga

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letter,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan.*

### Abstract

This paper argues how the style of traditional waka (Japanese poetry) changed in the transition from the Edo era to the Meiji era. I examine the poems and their forewords (kotoba-gaki) of Kuchibashu made by Iwasaki Toshinori, who was a man of wealth and local celebrity in the district of Harima. I conclude that Iwasaki's works reflect his geographical position. This is because he was given ample opportunity to come into contact with many famous 'civilized' poets because he lived in the important position of traffic.